

# 探訪 北の風景 42

## 雲海や摩周星紀行 住民主体の“えこ観光”

釧路管内弟子屈町

萩本和之

「わくすこい、雲海だ」「本当に、幻想的だ」。今年8月8日に「阿寒国立公園」から「阿寒摩周」へ名称が変更された。その観光の目玉の一つ、摩周・屈斜路雲海ツアーに参加して、幻想的なダブル雲海を体験、目に焼き付けてきた。

「摩周」の名称追加は戦前から弟子屈が熱望。指定80周年を迎えた昨年、やっと阿寒湖畔温泉街はじめ関係11市町が「厳しい道東観光の起死回生に」と変更に合意した。その陰には、住民主体のまちおこし団体「てしかがえこまち推進協議会」（「えこまち」）の地道な活動の成果がある。

弟子屈は森と湖と火山、さらに良質な温泉に恵まれ、1967年に大ヒットした歌謡曲「霧の摩

周湖」でも知られ、かつては北海道の代表的な観光地だった。ところが、観光が物見遊山型団体旅行から個人の体験型になるとともに、観光入り込み数は激減した。

そこで、スイス在住で「観光カリスマ」といわれる山田桂一郎さんの助言をもとに地域内の連携強化を狙い、住民主体で行政がサポート役となる「えこまち」を2008年に発足させた。「えこ」は「エコノミー」と「エコロジー」を掛けた。エコツーリズム推進や人財育成など8つの部会を設けて「観光と農業を基軸に循環型自立社会をめざし、みんなが誇れるまちづくり」団体とした。

翌年には地域密着型のツアーなどを住民目線で企画する旅行会社「ツアーリズムでしかが」も発足させた。観光客が自らのペースで「弟子屈の宝」を発掘、満喫してもらおう、と独自で周遊バスを運行したり、従来は交通手段がなく楽しむ事ができなかった深夜の「摩周湖星紀行」や早朝の「摩周・屈斜路雲海ツアー」を商品化した。町内外の人を対象として年一回「観光塾」も開催している。

8月26日。「第11回農業祭 たぶん日本で一番早い新そば祭り」（摩周湖農協主催）に合わせ現地に入り。摩周そばや「摩周ピーフ」の串焼きなどに舌鼓を打った。このイベントにも「えこまち」の食・文化部のメンバーが助っ人として応援していた。

JR摩周駅前付近の会場から移動して、完全無



「たぶん日本で一番早い新そば祭り」と銘打って開催された「第11回農業祭」。約4千人が訪れ、摩周そば3千食分がべろりと完食された＝摩周湖農協前特設会場

人化したJR川湯温泉駅へ。駅舎には観光活性化を目指す武山秀樹さんが開設しているカフェレストランや足湯があった。

夜は星空観光。各ホテルに立ち寄りながら40人以上が乗ったバスで地元出身のネイチャーガイド、山中拓也さんが案内。約30分かけて摩周湖第一展望台へ足を運んだ。夕立があっただけに心配されたが、逆に満天の星空。まさに宝箱をひっくり返したような天然のプラネタリウム。山中さんも「1カ月ぶりの満点の夜です」と興奮気味に見上げ、ポインターで天の川の煌めきをはじめ、きれいな流星や星座を分かりやすく紹介していた。フラッシュの光が妨げと写真撮影は禁止された。

翌日午前5時に山中さんのガイドで雲海ツアー。途中、川湯温泉が朝霧に包まれていたものの「雲海はかなり期待できます。しかし安心は絶対にできません」と脅かされた。





屈斜路湖カルデラに広がった雲海。川湯温泉もすっぽりと隠れてしまい、はっきりと硫黄山が浮かんだような格好。アマチュアカメラマンらがシャッターを盛んに切っていた、後ろの摩周湖の湖面には、朝日の中で浅い雲海がながれ、珍しい“ダブル雲海”に観光客らは歓声を上げていた冬は霧氷ツアーも＝8月27日午前5時44分、「摩周第三展望台」



完全無人化したJR川湯温泉駅。かつての駅事務室や駅長室をそのまま利用したカフェレストラン、昭和天皇が行幸の折りにご休憩されたという駅長室は、スタンドグラスなどレトロムード満点。足湯は温泉と木のぬくもりで心から温まる

第三展望台へ到着すると、屈斜路カルデラは一帯の雲海が広がる。通常は遠くに眺める屈斜路湖や川湯温泉も雲で隠れ、硫黄山（アトサヌブリ、512メートル）の山頂部がぼっかりと雲の上に浮かんでいる。約50人が歓声を上げシャッター音も響いた。

一方、摩周湖の方も浅い雲海がかかっていた。完全な共演とは言えないものの、朝日が鏡のような湖面に輝く中、朝日に追われる綿雲ように霧が流れる優美な様子に観光客らも見とれていた。ダブル雲海は珍しいそうで、新たな観光資源の魅力に魅了された。

昨年の台風などの悪影響もあって、入り込み数は今一つ。山田さんは「ニセコと違い、経済循環の主導権を地元が掌握しており、その分まちづくりを含めて可能性が十二分にある」と激励している。

△はぎもと かずゆき・元大学教授▽